



Title	西フリジア語の文法構造：動詞（9）
Author(s)	清水， 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要， 113， 65-108
Issue Date	2004-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34069
Type	departmental bulletin paper
File Information	113_PL65-108.pdf



西フリジア語の文法構造 — 動詞 (9) —

清 水 誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk

— tiidwurd (9) —

(*The Annual Report on Cultural Science* (No. 113). Graduate School of Letters, Hokkaido University, Sapporo, Japan 2004. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU Makoto (mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

§ 99 動詞群 (tiidwurdkloft) の語順と相互承接

(1) 動詞群の語順と IPP-効果による代替不定詞

動詞群の内部では、文法的意味に応じて動詞の配列がほぼ決っており、これを「相互承接」と呼ぶことがある。支配関係の順序に応じて、言語によっては全体として鏡に映したような逆の語順を示すこともある。西フリジア語とオランダ語はその好例である。以下、オランダ語との対比を交えながら説明し、必要に応じてドイツ語などにも言及する。

西フリジア語では右枠の動詞群(フ. tiidwurdkloft/オ. werkwoordreeks/エ. verbal complex)の語順は厳格に「左枝分かれ型」(エ. left-branching/オ. linksvertakking)である。つまり、支配される下位の要素 (X^{n+1} , オ. geregeerde) は支配する上位の要素 (X^n , オ. regent) の左側、つまり前につねに置かれる ($\cdots < X^2 < X^1 < X$)。また、オランダ語やドイツ語と違って、不定詞を支配する過去分詞が不定詞、つまり、「代替不定詞」(ド. Ersatz-infinitiv) として現われる「IPP-効果」(ラ. infinitivus pro participio) を

示さない（オランダ語の影響を受けた最近の若い世代の話者では、オランダ語的な語順と「IPP-効果」が観察される（Wolf 1995, De Haan 1996））。

一方、オランダ語では右枠の動詞群の語順は原則として「右枝分かれ型」（right-branching/オ. rechtsvertakking）である。つまり、支配される下位の要素（ X^{n+1} ）は支配する上位の要素（ X^n ）の右側、つまり後ろに原則として置かれる（ $X > X^1 > X^2 > \dots$ ）。また、ドイツ語と同様に、不定詞を支配する過去分詞が不定詞、つまり、「代替不定詞」として現われる「IPP-効果」を示す（ただし、オランダ語の言語規範は比較的ゆるやかであり、以上の語順と平行して「左枝分かれ型」の語順も許容される傾向がある。とくに、完了形では「完了の助動詞—過去分詞」（右枝分かれ型）とならんで「過去分詞—完了の助動詞」（左枝分かれ型）の語順が広く見られる）。

このように、西フリジア語とオランダ語は（標準語の規範としては）動詞群の語順と IPP-効果の有無において対照的であり、鏡像関係（オ. spiegelbeeld/エ. mirror image）を成す（De Haan 1987: 67, De Haan 1992: 83）。

i) 西フリジア語：左枝分かれ型（ $\dots < X^2 < X^1 < X$ ）

フ. Sy sizze dat it famke him *kommen sjen wold hawwe soe*. 「彼らはその娘は彼が来るのを（kommen）本当は見（sjen）たかつ（wold 過去分詞）た（hawwe）はずなのに（soe）と言っている」

ii) オランダ語：右枝分かれ型（ $X > X^1 > X^2 > \dots$ ）

オ. Ze zeggen dat het meisje hem *zou hebben willen zien komen*. 「彼らはその娘は彼が来るのを（komen）本当は見（zien）たかつ（willen 代換不定詞）た（hebben）はずなのに（zou）と言っている」

ドイツ語では西フリジア語と同様に、動詞群の語順は「左枝分かれ型」である。ただし、動詞が三つ以上の動詞群では、特定の条件のもとで、動詞群の右側にあるはずの要素が左側に現われることがあり、オランダ語と同様に IPP-効果による代換不定詞を示す（Bech 1955, De Haan 1987: 67, De Haan 1993: 119）。

ド. Sie sagen dass das Mädchen ihn *kommen sehen gewollt haben sollte*. 「彼らはその娘は彼が来るのを（kommen）見（sehen）たかつ

(gewollt 過去分詞/以下の用例の *wollen* は代換不定詞) た (*haben*)
はずなのに (*sollte*) と言っている」

Sie sagen dass das Mädchen ihn *sollte* [*kommen sehen gewollt haben*]. 「同上」

Sie sagen dass das Mädchen ihn *sollte haben* [*kommen sehen wollen*]. 「同上」

Sie sagen dass das Mädchen ihn *sollte haben wollen* [*kommen sehen*]. 「同上」

このドイツ語の用例では、「下位要素<上位要素」($\cdots < X^2 < X^1 < X$) という語順が守られている範囲では IPP-効果による代替不定詞は現われない。それが現われるのは、それが破られた場合である。

代替不定詞を含む動詞の語形は表層での形態的現象であり、形態表示の一般的原則を反映していると考えられる。動詞群は形態的にひとつのまとまりを成すという仮定に立てば(下の注を参照)、複合語(=合成語)における形態表示規則に相当する原則が適用され则认为られる。西フリジア語・オランダ語・ドイツ語の3言語では、品詞を問わず、複合語の構成要素の配列は「下位要素<上位要素」($\cdots < X^2 < X^1 < X$)であり、形態表示は右側(後)に位置する上位の構成要素が左側(前)に位置する下位の構成要素に与える。この配列を守る西フリジア語や一部のドイツ語の動詞群では、典型的な構成要素の配列を成しているので、形態表示も規則的になされ则认为られる。ところが、この配列から逸脱したオランダ語や一部のドイツ語の動詞群では、もはや典型的な構成要素の配列を成していないので、形態表示も厳密に規則的にはなされない。IPP-効果による代替不定詞の有無はこのように説明され则认为られる。

ここで注意すべきは、動詞群と複合語は構成要素の配列の自由度において異なり、複合語では配列が厳格に守られるのにたいして、動詞群では個々の構成要素の独立性が強く、配列に自由度が認められるということである。つまり、動詞群の形態的なまとまりは比較的ゆるやかであると言える。

☞ 動詞群の語順は上述の3言語だけでなく、日本語などでもかなり共通した一般

性の高い原則に関係すると考えられる。たとえば、「待た－され－続け－られ－なければならなかつた－だろ－う－か」では、「語彙の意味－使役－アスペクト－受動－話法（客観的用法）－完了－話法（主観的用法）－話法（終助詞）」という配列になっており、出来事内部の関与者と時間的構造から他の出来事との時間的関連に及び、発話者と発話状況との関連に至るという配列順序が認められる。

- ☞ 動詞群の性質とその派生については意見が分かれている。Evers (1975) では個々の動詞は基底ではそれぞれ文投射を備えており、動詞繰り上げ(エ. verb raising)によって動詞をひとつ上位の動詞にチョムスキー付加(Chomsky-adjoin)することによって、表層では一種の複合動詞(エ. complex verb)である動詞群(エ. verbal complex)として現われるとみなされている。これにたいして、Kroch & Santorini (1991) は動詞群は表層でも文の複合体であり、動詞をそれを支配する文にチョムスキー付加することによって得られるとしている。この分析では「動詞群」という概念は意味を持たない。さらに、すでに Hoeksema (1980) 見られるように、動詞群はすでに基底生成されているという考えかたもある。この分析では動詞繰り上げは問題にならない。ちなみに、この第3の考えかたには膠着語的な発想があり、日本語の話者には理解しやすい部分がある。なお、De Haan (1992) はこの考えかたを支持している。

(2) IPP-効果による代替不定詞と「二重過去分詞」

西フリジア語ではIPP-効果による代替不定詞は見られないが、それに類似した現象は観察される。このことを把握するためには、IPP-効果の意義を動詞不定形全体で形態論的に考察する必要がある。

すでに述べたように、西フリジア語の不定形には第1不定詞(e-不定詞、例. rinne「歩く」/lêze「読む」)、第2不定詞(en-不定詞, rinnen/lêzen)、te-第2不定詞(en-不定詞, te rinnen/te lêzen)、第3不定詞(命令形不定詞, rin/lês)、現在分詞(rinnend/lêzend)、過去分詞(rûn/lêzen)がある。§ 94 でも述べたように、第1不定詞(rinne/lêze)は無標(エ. unmarked)の語形であり、他の語形は有標(エ. marked)である(オランダ語とドイツ語では不定詞が無標の語形である)。過去分詞が不定詞として現われることは、有標の語形が無標の語形に変わることを意味する。つまり、代替不定詞は「有標の語形が無標の語形で代用する」という一般的な傾向の一例と理解できる。

たとえば、西フリジア語で名詞を修飾する限定用法では、in lêzende frou「読書する女性」(現在分詞)、in lêzen boek「読まれた本」(過去分詞)、in te lêzen boek「読むべき(＝読まれるべき)本」(te-第2不定詞)のように、個々の不定形には独自の役割があり、示差的な意味を表わす。この場合、異なる動詞不定形は同時には現われず、語形的な区別が明確になされ、他の語形で代用されることはない。しかし、動詞が右枠で「 $X^2 < X^1 < X$ 」のように隣接して同時に現われる場合には、動詞群であることが明らかであり、しかも複合語の形態素配列の原則に反する語順になっているので、相互の形態的区別が不明確になることがある。形態素配列の原則を保持する西フリジア語でも、IPP-効果による代替不定詞とは別に、無標の語形による動詞不定形の代用が起こることがある。

まず、次例では「[完了の助動詞 過去形]…第2不定詞+[知覚動詞 第1不定詞]+過去分詞」という動詞群の連続で、知覚動詞 hearre「聞く」が第2不定詞 sjongen「歌う」/sizzen「言う」のかわりに第1不定詞 sjonge「同左」/sizze「同左」を伴うことがあるという判定がある。

動詞群：「[完了の助動詞 過去形]… {第2不定詞/「第1不定詞」}+[知覚動詞 第1不定詞]+過去分詞」

Ik hie him graach [{sjongen/sjonge} hearre wollen]. 「私は彼が歌う(sjongen 第2不定詞/sjonge 「第1不定詞」)のを聞き(hearre 第1不定詞)たかつ(wollen 過去分詞)たのだが(hie 過去形)」(Van der Woude 1975: 4)

Ik hie dat net [{sizzen/sizze} hearre moatten]. 「私はそのことを口に出す(sizzen 第2不定詞/sizze 「第1不定詞」)のを聞いて(hearre 第1不定詞)てしまっけなかつ(net…moatten 過去分詞)たのだが(hie 過去形)」(ib. 4)

また、次の用例では「定冠詞 it+第2不定詞+te-第2不定詞」という動詞群の連続で、第2不定詞 besykjen「…しようとする、…することを試みる」よりも第1不定詞 besykjeのほうが好まれるという判定がある。

動詞群：「定冠詞 it+ {第2不定詞/「第1不定詞」}+te-第2不定詞」

it moaie blommen {^{*2}besykjen/*besykje*} te keapjen 「きれいな花を買おう (te keapjen te-第2 不定詞) とする (besykjen 第2 不定詞/*besykje* 「第1 不定詞」) こと」 (Visser 1989b: 70)

it {^{*2}besykjen/*besykje*} te keapjen fan moaie blommen 「同上」 (ib. 70)
さらに、次の用例では「om…[te-第2 不定詞+[te-第2 不定詞]]」という動詞群の連続で、前(左側)の te-第2 不定詞 te sitten 「すわって…する」が第1 不定詞 sitte 「同左」でも可能であるという判定がある。

動詞群: 「om…[te-{第2 不定詞/「第1 不定詞」}+[te-第2 不定詞]]」

om de hiele jûn {te sitten/*sitte*} te lêzen 「一晩中、(すわって) 読書していること (=読みながら (te lêzen te-第2 不定詞) すわっていること (te sitten te-第2 不定詞/*sitte* 「第1 不定詞」)」 (Hoekstra 1997: 17)

上記の事実は、動詞は単独で現われる場合と相互に隣接する場合で、形態表示の厳密さの度合いが異なることを示している。動詞が単独で現われるときには、文法的役割を形態的に厳密に明示する必要があるので、無標の語形による動詞不定形の代用は起こりにくい。一方、動詞が相互に隣接して現われるときには、動詞群を形成することが明確なので、動詞間の支配関係を形態的に厳密に明示する必要性はそれほど強くなく、動詞群内部の形態的支配関係の表示の制約が弱化する傾向がある。doare 「あえて…する」/hoege (hoeve) 「(+否定) …する必要がない」 (§ 77 (2)) が不定詞と隣接しない場合には te-第2 不定詞を伴い、右枠で不定詞と隣接する場合には第1 不定詞を伴うことがあるという事実も、これと関係があると考えられる。ただし、上述の現象は規則的に認められるわけではなく、規則性の高い IPP-効果による代替不定詞とは異なる。

これとは逆に、「無標の語形を有標の語形で代用する」という正反対の現象が見られることがある。それは不規則な「二重過去分詞」(ûnregelmjittige dûbele mulwurd) と呼ばれるもので、Bloemhoff (1979) が西フリジア語地域の南側に隣接するオランダ語ステリングヴェルヴェン方言(オ. Stellingwerfs, ス.)で指摘しており、西フリジア語でも見られる (Hoekstra 1987: 15)。たとえば、次例では完了の助動詞フ. ha(wwe)/ス. hebben(オ. hebben/

ド. *haben*/エ. *have*)に支配された過去分詞フ. *dien*/ス. *daon*「する」(オ. *gedaan*/ド. *getan*/エ. *done*)に加えて、前域に置かれた話法の助動詞フ. *soe*/ス. *zol*「…だろう」(オ. *zou*/ド. *sollte*/エ. *should*)に支配されて(第1)不定詞フ. *kinne*/ス. *kunnen*「…できる, 可能である」(オ. *kunnen*/ド. *können*)として現われるはずの話法の助動詞が過去分詞 フ. *kinnen*/ス. *kund*(オ. *gekund*/ド. *gekonnt*)として現われている(とくにオランダ語ステリングヴェルヴェン方言では不定詞 *kunnen* は不可)。つまり, フ. *dien*…*kinnen*/ス. *daon*…*kund* という例外的な二つの過去分詞が現われている。

フ. *Soe hy dat dien ha {kinne/kinnen}*? 「彼がそれをし (dien 過去分詞) た (ha 第1不定詞) ということがあり得る (kinne 第1不定詞/*kinnen* 「過去分詞」) のだろうか (soe)」(Hoekstra 1987: 15)

ス. *Zol hi'j dat daon hebben {*kunnen/kund}*? 「彼がそれをし (daon 過去分詞) た (hebben 不定詞) ということがあり得る (kunnen 不定詞/*kund* 「過去分詞」) のだろうか (zol)」(Bloemhoff 1979: 31)

ところが、話法の助動詞 フ. *soe*/ス. *zol* が右枠の動詞群の最後に置かれて他の動詞と隣接すると、西フリジア語でもオランダ語ステリングヴェルヴェン方言でも二重過去分詞は許されず、規則的な(第1)不定詞が現われる。

フ. *Sy mijе Geart, omdat dy it wol dien ha {kinne/*kinnen} soe*. 「それをし (dien 過去分詞) た (ha 第1不定詞) ということがあり得る (kinne 第1不定詞/*kinnen* 「過去分詞」) かもしれない (soe) という理由で、彼らはゲアトを避けている」(Hoekstra 1987: 15 変更)

ス. *Ze mieden Geert, omdat die et wel daon hebben {kunnen/*kund} zol*. 「それをし (daon 過去分詞) た (hebben 不定詞) ということがあり得る (kunnen 不定詞/*kund* 「過去分詞」) かもしれない (zol) という理由で、彼らはヘールトを避けている」(Bloemhoff 1979: 33 変更)

二重過去分詞が現われる場合には、上位の要素が下位の要素の右側に隣接

するという形態表示の配列にかんする原則が崩れていると言える。

☞ Bloemhoff(1979)は「表層構造の再分析」(オ. heranalyse van de oppervlakte-structuur)によってこの現象を説明している。

このように、IPP-効果による代替不定詞とこれに相反する二重過去分詞という例外的現象が現われる理由は、動詞群は形態的にひとまとまりを成し、右側に位置する上位の構成要素が左側に位置する下位の構成要素に形態表示を与えるという原則と、動詞群内部の構成要素配列の自由度、それに、動詞群内部の形態的支配関係の表示制約の弱化という要因の複雑な相互作用によると考えられる。

(3) te-第2 不定詞の語順：「オーヴェルディープ(Overdiep)の法則」(wet van Overdiep)

上述のように、西フリジア語では動詞群の語順は厳格に左枝分かれ型($\dots X^2 < X^1 < X$)を示す。ところが、右枝分かれ型($X > X^1 > X^2 \dots$)を示す動詞不定形がひとつだけある。それはある種の te-第2 不定詞であり、動詞群の右側(後)に現われる。ここでは、「te-第2 不定詞の外置」が起こっている。これが te-不定詞とそれを支配する上位の動詞の間での倒置(オ. inverzie/エ. inversion)ではないことは、te-第2 不定詞が他の動詞成分を越えて(次の用例では moatten) 動詞群の最後に置かれることからわかる。

フ. Do *hiest* noch langer *lizze moatten te harkjen*. 「君はもっと長い間、(横になって *lizze*) 聞いて (*te harkjen*) いなければならなかつ (*moatten*) たのに (*hie*)」(Overdiep 1937: 125 正書法変更)

オ. Je *had* nog langer *moeten liggen luisteren*. 「同上」(ib. 125)

Overdiep (1937 (1947)) は te-第2 不定詞が他の動詞成分よりも後に置かれる現象をオランダ語とは異なる西フリジア語の特徴と指摘しており、De Haan (1987: 67) はこれを「オーヴェルディープの法則」(オ. wet van Overdiep)と命名した。ただし、§ 98 の随所で指摘したように、すべての te-第2 不定詞がこの語順を示すわけではない。これは te-第2 不定詞の多様な性格を示しており、この点で「オーヴェルディープの法則」は動詞群におけ

る te-第2 不定詞を下位分類する重要な要因になる。

(4) 動詞群の用例

(a) 主文：動詞三つ

① 話法の助動詞 定形

i) [話法の助動詞 定形]…[第1 不定詞]+[話法の助動詞 第1 不定詞]

Elkenien *moat* him *útprate kinne*. 「だれでも自分の意見を言い尽くすことができないといけない」(ULI'S, C 12: 12)

Wy *sille* net lang *bliuwe kinne*. 「私たちは長い間とどまることはできないでしょう」(ULI'S, B 18: 19)

Hy *sil* dochs in waarm iten *hawwe moatte*? 「でも、彼は暖かい食事を取る必要はあるんでしょう?」(ULI'S, B 20: 22)

De tiid *sil* 't *leare moatte*. 「時がそれをかならず教えるだろう」(De Boer 1986: 112 (VII))

Hy *sil* syn wurk dochs *dwaan moatte*. 「彼はちゃんと自分の仕事をしなければいけないだろう」(ULI'S, B 18: 19)

「soe…第1 不定詞+wolle」は控えめな願望の表現として多用する(オ. zou…willen+不定詞/ド. möchte…不定詞/エ. would like to+不定詞)。
Soe dat *slagje kinne*? 「そのことはいまいく可能性があるのだろうか」(Bosma-Banning 1981²: 159)

Dit paad *soe liede moatte* nei de mar. 「この道は湖に通じているはずだ」(ULI'S, B 12: 15)

Ik *soe* gjin fêste relaasje mear *ha wolle* leau 'k. 「ぼくはもう所帯を固める気にはならないだろうと思うな」(Bangma 1993²: 10)

Soest foar my twa bôlen *meinimme wolle*? 「私のために白パンを2切れ持って行ってくれないか」(ULI'S, B 18: 19)

Wêrom *soe* se dy net *sjen wolle* dan? 「それなら彼女はなぜ君の姿を見たくないのだろうか」(Bangma 1993²: 10)

Wy *soene* wol efkes noflik yn 'e kombot *sitte wolle*. 「私たちはローフ

- (=甲板上の小部屋)にくつろいですわっていたいのですが」(ULI'S, B 20: 22)
- ii) [話法の助動詞 定形]…[第1不定詞]+[使役の助動詞 第1不定詞]
Ik *sil* jimme ris wat *sjen litte*. 「私は君たちに何か見せてあげよう」
(ULI'S, B 12: 7 変更)
- iii) [話法の助動詞 定形]…[第2不定詞]+[知覚動詞 第1不定詞]
De bern *kinne* dus net mear foar skoaltiid in baarch *slachtsjen sjen*.
「子供たちは、したがって、もう登校前に豚を屠殺するのを見ることができない」(ULI'S, B 18: 21)
Wy *koene* him *praten hearre*. 「私たちは彼が話をするのを聞くことができた」(Popkema 1987: 50 変更)
- iv) [話法の助動詞 定形]…[過去分詞]+[完了の助動詞 第1不定詞]
Soe hja dat wol *witten ha?* 「彼女はそれを知っていたのだろうか」
(ULI'S, B 14: 11)
Hja *mei* dat *dien hawwe*. 「彼女は(たしかに)それをしたかもしれない(けれども)」(Popkema 1987: 49 変更)
- v) [話法の助動詞 定形]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第1不定詞]
Der *moatte* hjir huzen *boud wurde*. 「ここには家が建てられなければならない」(ULI'S, C 8: 15)
Der *moast* hiel wat *skreaun en belle wurde* om alles te regeljen. 「万事手はずを整えるために、山ほど書類を書いて電話する必要があった(=書かれ、電話されなければならなかった)」(ULI'S, B 14: 16)
Dêr *sil* de oare kear oer *stimd wurde*. 「そのことについて別の機会に投票がなされる必要があるだろう」(ULI'S, C 8: 12)
- vi) [話法の助動詞 定形]…[sitte 第2不定詞]+[bliuwe 第1不定詞]
Hja *moast* dêr dochs *sitten bliuwe*. 「彼女はそれでもそこにすわったまままでいなければならなかった」(Popkema 1987: 49 変更)
- vii) [話法の助動詞 定形]…[第2不定詞]+[leare 第1不定詞]
It is winter en no *silst riden leare*. 「冬だから、おまえはスケートを習

うんだぞ」(ULI'S, B 11: 11)

De jonges *wolle silen leare*. 「子供たちはヨット乗りを習いたがっている」(Bosma-Banning 1981²: 159 変更)

- viii) [話法の助動詞 定形]…[leare 第1不定詞]+[te-第2不定詞]

Moatte wy leare te libjen mei in grut tal wurkleazen? 「私たちは大勢の失業者と暮らすことを学ばなければならないのだろうか」(ULI'S, C 13: 8)

- ix) [話法の助動詞 定形]…[te-第2不定詞]+[wêze 第1不定詞]

Dat soe sjoen de lizzing hiel skoan te begripen wêze. 「そのことは位置を考慮すれば、きわめて良く理解できよう」(Breuker et al. 1992: 17)

② 完了の助動詞 定形

- i) [完了の助動詞 定形]…[第1不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]

完了の助動詞は現在形と過去形の二つの場合があるが、現在形の例はそれほど多くない。話法の助動詞を用いて過去の事実を表現するときには過去形を用いることが多く、現在完了形にする傾向は弱い。

Pyt hat dat dwaan mocht. 「ピトはそれをしてよかった(=することが許された)」(Popkema 1987: 49 変更)

Sy ha net allinnich gean wollen. 「彼らは自分たちだけでは行きたがらなかった」(ULI'S, C 12: 19)

Sy hat dat sizze wollen. 「彼女はそれを言いたかったのです」(ULI'S, B 12: 15 変更)

完了の助動詞が過去形の例はかなり多い。ただし、次の用例のように純粋に過去完了形としての時間関係を表わすものは少ない。

Klaas sei, dat er lêze wollen hie. 「クラスは自分は読みたかったのだと言った」(ULI'S, C 12: 19)

完了の助動詞が過去形の例では、過去の時点で現実とはならなかった仮定の出来事や推量を表わすことが圧倒的に多い。つまり、話法の助動詞の完了形は時間表現としての性格が薄く、話法的な表現手段としての性格が強い。とくに過去形には話法的な性格が顕著であり、時制のカテゴリ

リーから話法のカテゴリーに大きく移行している (§ 74 (2), § 75 (4), § 76 (5))。

Jo *hiene* better op bēd *bliuwe kinnen*. 「あなたは寝ていたほうが良かったのに」 (Bangam 1993²: 47)

Wy *hiene* yn dy snuorje net lang *bliuwe kind*. 「私たちはその時代には長生きできなかっただろう」 (ULI'S, B 20: 22 変更)

Hiesto dat net efkes *dwaan kinnen*? 「ちょっとそれをしてくれてもよかったんじゃないの?」 (ULI'S, B 18: 18)

Hy *hie* my skoan *helpe kinnen*. 「彼は私に手助けしてくれても良かったのに」 (ULI'S, B 18: 21 変更)

Wa *hie* ea *tinke kind* dat it nochris safier komme soe? 「またそういうことになるなんて、だれが考えられただろう」 (ULI'S, B 20: 18 変更)
次の文でも過去完了形は時間の前後関係と並んで、過去の時点において現実とはならなかった仮定の出来事を表わしており、話法的な性格を示している。

Dat *hiene* wy net *dwaan moatten*. 「それは私たちは本当はしてはいけなかったのだろう」 (ULI'S, B 18: 18)

Ik *hie* dat net *freegje moatten*. 「私は本当はそのことをたずねてはいけなかったのだろう」 (ULI'S, B 18: 18)

Ik *hie* dat *dwaan sille*n. 「私はそれをするべきだったのかもしれない」 (ULI'S, B 12: 15)

Wy *hiene* dat wurk *dwaan wold*. 「私たちはその仕事をしたかったのに」 (ULI'S, B 12: 17 変更)

Wy *hiene* ús wurk graach ôf *ha wollen*. 「私たちは仕事をすませたかったのに」 (ULI'S, B 18: 21 変更)

Dat *hie* ik graach *sjen wollen*. 「それを私は見たかったのに」 (ULI'S, B 18: 19)

Dy snikke *hie* ik graach *sjen wold*. 「その小船を私は見たかったのだか」 (ULI'S, B 20: 22 変更)

ii) [完了の助動詞 定形]…[第 2 不定詞]+[知覚動詞 過去分詞]

Ik ha him net fuortgean sjoen. 「私は彼が立ち去るのが見えなかった」
(ULI'S, B 18: 21)

Ik ha sels sizzen heard dat it sa wie. 「私自身、それがそういうことだ
と言うのを聞きました」 (ULI'S, B 18: 21)

Hawwe jo de bern sjongen heard? 「あなたは子供たちが歌うのを聞き
ましたか」 (Bosma-Banning 1981²: 57 変更)

Ik ha har juster noch in stikje spyljen heard. 「わたしは彼女が昨日、
もう一曲演奏するのを聞いた」 (Boersma/Van der Woude 1980²: 75 変
更)

Wy hiene har net oankommen heard. 「私たちには彼女が到着したのが
聞こえなかったような気がしたのだが」 (Popkema 1987: 50 変更)

iii) [完了の助動詞 定形]…[steane/sitte/stikje/wenje 第 2 不定詞]+[bliuwe/
gean 過去分詞]

Wy binne efkes stean bleaun. 「私たちはちょっと立ち止まっていた」
(ULI'S, B 18: 19)

Wy binne yn it ferkear stikjen bleaun. 「私は交通渋滞に巻き込まれた」
(Dykstra 2000: 669 変更)

Wy binne acht jier yn Frjentsjer wenjen bleaun. 「私たちは 8 年間、フ
リエンテル(オ. Franeker「フラーネケル」)に住み続けました」 (ULI'S,
B 11: 22)

Wy binne krekt foar de televyzje sitten gongen. 「私たちはちょうどテ
レビの前に腰を下ろした」 (ULI'S, B 11: 23)

Ik bin hjir mar stean gien, dan kin ik de skûtsjes moai sjen. 「私はこ
こでちょっと立ち上がったので、それでヨットがよく見えます」 (ULI'S,
B 11: 22 変更)

iv) [完了の助動詞 定形]…[bliuwe/steane/komme 過去分詞]+[te-第 2 不
定詞]

Dêr is er oan syn dea ta bleaun te wenjen. 「そこで彼は死ぬまで住み

続けた」(Stienstra 1982: 47)

Ik *ha* in oere by him *stien te praten*. 「私は彼のところで1時間、立ち話をしていた」(ULI'S, C 17: 19)

Nei myn trouwen *bin* ik hjir *kommen te wenjen*. 「結婚後、私はここに移り住んだ」(ULI'S, C 15: 18)

- v) [完了の助動詞 定形]…[過去分詞]+[te-第2不定詞]

Dat *haw* ik *fergetten te dwaan*. 「それを私はやり忘れた」(Bosma-Banning 1981²: 127)

- vi) [完了の助動詞 定形]…[wêze 過去分詞]+[te-第2不定詞]

Fan 'e moarn *hat* Hindriks Tsjits by my *west te koffjedorinken*. 「今朝、ヒンドリクス・チイツがうちにコーヒーを飲みに来た」(ULI'S, B 15: 7)

- vii) [完了の助動詞 定形]…[te-第2不定詞]+[wêze 過去分詞]

Juster *ha* wy *te swimmen west*. 「昨日、私たちは泳ぎに行って来ました」(ULI'S, C 10: 19)

③ 使役の助動詞 定形

[使役の助動詞 定形]…[sitte 第2不定詞]+[gean 第1不定詞]

Wy *litte* har dêr *sitten gean*. 「私たちは彼女をそこにすわせます」(Popkema 1987: 49 変更)

④ 受動の助動詞 定形

[受動の助動詞 定形]…[第1不定詞]+[使役の助動詞 過去分詞]

De bern *wurde* mar *rinne litten*. 「子供たちはただ歩かされるだけだ」(ib. 50)

Der *wurdt* troch har in ferske *sjonge litten*. 「彼女によって詩歌が歌われる」(ib. 50 変更)

⑤ bliuwe/gean 定形

[bliuwe/gean 定形]…[steane/sitte 第2不定詞]+[te-第2不定詞]

De hûn *bliuwt* hjir *steane te wachtsjen*. 「犬はここで立って待ち続けている(=待つために立ち続けている)」(ULI'S, B 15: 21)

Us pake *giet* altyd by de kachel *sitten te krantsjen*. 「祖父はいつも新

聞を読むために暖炉のそばに腰を下ろす」(ULI'S, B 15: 21)

(b) 主文：動詞四つ

① 話法の助動詞 定形

- i) [話法の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]+
[話法の助動詞 第 1 不定詞]

Men *soe* it smoken *litte kinne moatte*. 「タバコはやめることができなくてはいけなだろう」(ULI'S, B 12: 17 変更)

De minske *sil* him wer *ferwûnderje kinne moatte* oer alles wat der om him hinne bart. 「人間は自分のまわりで起こっていることすべてに再び驚嘆できるようにならなければならないだろう」(ULI'S, C 9: 16)

- ii) [話法の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 第 1 不定詞]+
[話法の助動詞 第 1 不定詞]

Wy *sille* de fûgels net oer it net *fleane litte moatte*. 「私たちは鳥を網より上に飛ばしてはならないだろう(=好機を逃すな。ことわざ)」(Bosma-Banning 1981²: 111)

- iii) [話法の助動詞 定形]…[過去分詞]+[完了の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]

As it ferzen hie, *soene* de diken *glêd wurden wêze kinne*. 「もし霜が降りたら、道はつるつるになっていたかもしれないのに」(ULI'S, C 12: 21 変更)

As de auto stadiger riden hie, *soe* alles noch bêst goed *gien wêze kinne*. 「もし自動車がもっとスピードを落として走っていたら、すべてがうまくいっていたかもしれないのに」(ULI'S, C 12: 21)

- iv) [話法の助動詞 定形]…[第 2 不定詞]+[知覚の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 第 1 不定詞]

Hy *koe* har net *oankommen heard hawwe*. 「彼は彼女が到着したのが聞こえなかったのかもしれない」(Popkema 1987: 50 変更)

- v) [話法の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完

了の助動詞 第1 不定詞]

Hy *sil* dat boek *lêze moatten hawwe*. 「彼はその本を読んでおかなければならなかったのだろう」(ib. 49 変更)

- vi) [話法の助動詞 定形]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第1 不定詞]+[話法の助動詞 第1 不定詞]

As oplossing *sil besocht wurde moatte* de minske op 'e nij yn 'e kunde te bringen mei de natoer om him hinne. 「解決策として、人間をもう一度、自分のまわりの自然に親しませることが試みられる必要があるだろう」(ULI'S, C 9: 16)

Dêr *soe* wol mear gebrûk fan *makke wurde kinne*. 「本当はそれをもっと利用されなければならないだろう」(ULI'S, C 20: 6 変更)

Om skuorbot foar te kommen, *soe* mear griente *iten wurde moatte*. 「壊血病を予防するために、もっと野菜を食べる (=野菜が食べられる) 必要があるだろう」(ULI'S, B 11: 21)

- vii) [話法の助動詞 定形]…[stean 第2 不定詞]+[bliuwe 第1 不定詞]+[話法の助動詞 第1 不定詞]

De blommen *sille* wol *stean bliuwe moatte*. 「花はそのまま咲いていなければならないだろう」(ULI'S, B 18: 18)

- viii) [話法の助動詞 定形]…[sitte 第2 不定詞]+[bliuwe 完了分詞]+[完了の助動詞 第1 不定詞]

Hja *soe* dêr *sitten bleaun wêze*. 「彼女はそこにすわり続けたかもしれない」(Popkema 1987: 49 変更)

- ix) [話法の助動詞 定形]…[stean 第2 不定詞]+[知覚の助動詞 第1 不定詞]+[te-第2 不定詞]

Is it hea klear, dan *kin* men soms wol tweintich man op in rigele yn it lân *stean sjen te swyljen* om it hea yn wurdzen te krijen. 「干し草ができあがると、20 人あまりの男性が干し草を束にするために、列をなして農地に立って熊手でかき集めるのをときどき目にするがある」(ULI'S, C 12: 7 変更)

- x) [話法の助動詞 定形]…[leare 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]+
[te-第 2 不定詞]

Hy sil wer leare moatte te sjen, te harkejn en te ferstean. 「人間は見る
ことと聞くことと理解することを再び学ぶ必要があるだろう」(ULFS, C
9: 16)

② 完了の助動詞 定形

- i) [完了の助動詞 定形]…[第 2 不定詞]+[知覚の助動詞 第 1 不定詞]+
[話法の助動詞 過去分詞]

Wy ha him praten hearre kinnen. 「私たちは彼が話をするのを聞くこ
ととすることができた」(Popkema 1987: 50 変更)

- ii) [完了の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 第 1 不定詞]+
[話法の助動詞 過去分詞]

Do hiest dat boek better lizze litte kinnen. 「おまえはその本をもっと
ちゃんとしまっておくことができてよかったのに」(ULFS, B 18: 9)

- iii) [完了の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 過去分詞]+[受
動の助動詞 過去分詞]

Der is troch har in ferske sjonge litten wurden. 「彼女によって詩歌が
歌わされた」(ib. 50 変更)

- iv) [完了の助動詞 定形]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第 1 不定詞]+[話
法の助動詞 過去分詞]

It wurk hie better dien wurde moatten. 「その仕事はもっと良くなされ
なければならなかったのに」(Eisma 1989: 21)

- v) [完了の助動詞 定形]…[sitte 第 2 不定詞]+[bliuwe 第 1 不定詞]+[話
法の助動詞 過去分詞]

Ik hie dêr lekker sitten bliuwe moatten. 「私はそこに心地よくすわりつ
づける必要があったのかもしれない」(ULFS, B 18: 10)

Hja hie dêr sitten bliuwe kinnen. 「彼女はそこにすわりつづけることが
できたかもしれない」(Popkema 1987: 49 変更)

- vi) [完了の助動詞 定形]…[sitte 第 2 不定詞]+[bliuwe 第 1 不定詞]+[使

役の助動詞 過去分詞]

Wy *hawwe* har dêr *sitten bliuwe litten*. 「私たちは彼女をそこにすわり続けさせた」(ib. 49 変更)

- vii) [完了の助動詞 定形]…[steun 第 2 不定詞]+[bliuwe 過去分詞]+[te- 第 2 不定詞]

De skipper *wie* op 'e dyk *steun bleaun te praten*. 「船乗りは堤防の上で話をしながら立ちどまっていた」(ULI'S, B 20: 22)

(c) 主文：動詞五つ

完了の助動詞 定形

- i) [完了の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]

Hja *hie* in ferske *sjonge litte kinne moatten*. 「彼女は詩歌を歌わせることができなければならなかっただろうに」(Popkema 1987: 51 変更)

- ii) [完了の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 過去分詞]+[受動の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]

Der *hie* wol in ferske *sjonge litten wurde kinnen*. 「詩歌が歌わせられることができただろうに」(ib. 51 変更)

(d) 従属文：動詞二つ

① 話法の助動詞 定形

[補文標識]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

Dan witte jo *wêr't* jo om *tinke moatte*. 「そうすれば、あなたは何をよく考えなければならないかわかるでしょう」(ULI'S, C 10: 11)

Hy sei, *dat* er wol graach in kursus *folgje woe*. 「彼は講習を受けたいと言っていた」(ULI'S, B 19: 5)

Lid wurde kin elk dy't mei de Fryske útjouwerij yn brede betsjutting te krijen hat *as* er foar tûzen gûne *steun doar*. 「広義のフリジア語書籍出版に関係があり、1000 ギルダー出費できる人はだれでも会員になれま

す」(ULI'S, B 16: 11)

② 完了の助動詞 定形

[補文標識]…[過去分詞]+[完了の助動詞 定形]

As er it *dien hat*, sil er it sizze. 「それをやってしまったら、彼はそう言うだろう」(Bosma-Banning 1981²: 59 変更)

Wy liezen yn 'e krante *dat jo ferhuze binne*. 「私たちにはあなたが転居したことを新聞で読みました」(ib. 119)

Ik frege *oft* er it nijs al *heard hie*. 「私は彼がその知らせをすでに聞いたかとたずねた」(ib. 102)

Tige wiidweidich hat er ús ferteld *wat* er dêr *belibbe hie*. 「ひじょうに詳細に彼は自分がそこで何を体験したかを私たちに語った」(ULI'S, B 13: 18)

Wy liezen yn de krante *dat* it iis *brutsen wie*. 「私たちは氷が割れたことを新聞で読んだ」(ULI'S, C 9: 15)

③ 使役の助動詞 定形

[補文標識]…[第1不定詞]+[使役の助動詞 定形]

Hy seit *dat* er de bern *rinne lit*. 「彼は子供たちを歩かせると言っている」(Hoekstra 1997: 14 変更)

④ 知覚の助動詞 定形

[補文標識]…[第2不定詞]+[知覚の助動詞 定形]

Hy seit *dat* er de bern *rinnen sjocht*. 「彼は子供たちが歩いているのが見えると言っている」(ib. 14 変更)

⑤ *wêze/falle/hawwe* 定形

i) [補文標識]…[te-第2不定詞]+[*wêze* 定形]

Wy sjogge alles *wat der te sjen is*. 「私たちは見られるものはすべて見えています」(ULI'S, B 16: 13)

Dy't net te rieden is, is net te helpen. 「忠告できない者は助けられない」(Zantema 1984: 814)

ii) [補文標識]…[te-第2不定詞]+[*falle* 定形]

Elk wurd hat wol syn funksje yn de sin, mar de measten hawwe in nauwere, eigen relaasje mei ien of mear oare wurden yn de sin, *sadat* in sin ornaris yn groepen *te ferdielen falt*. 「どの語にも文中では自分の役割があるが、ほとんどの語は文中のひとつあるいはいくつかの語とより密接な独自の関係があるので、文はふつう複数のグループに分けられることになる」(Boersma/Van der Woude 1980²: 62)

iii) [補文標識]…[te-第2不定詞]+[hawwe 定形]

De saak is, *dat* wy hjir *te dwaan hawwe* mei in tastân, dy't algemien is. 「つまりは、私たちはここで一般的な状況にかかわっているのです」(WFT 8/1991: 178)

Lid wurde kin elk dy't mei de Fryske útjouwerij yn brede betsjutting *te krijen hat* as er foar tûzen gûne stean doar. 「広義のフリジア語書籍出版に関係があり、1000 ギルダール出費できる人はだれでも会員になれます」(ULF'S, B 16: 11)

It FLMD yn Ljouwert bewarret alles *wat te krijen hat* mei de Fryske skriuwerij. 「リャウエト(オ・Leeuwarden「レーヴァルデン」)のフリジア語文学博物館文書館(FLMD)はフリジア語文学に関係するすべてのものを所蔵している」(ULF'S, B 16: 20)

⑥ gean 定形

[補文標識]…[te-第2不定詞]+[gean 定形]

Gabe giet te aaisykjen, *wylst* syn frou *te boadskipjen giet*. 「妻は買い物に行く一方で、ガーベは野鳥の卵探しにでかける」(ULF'S, A 19: 19)

⑦ begjinne 定形

i) [補文標識]…[begjinne 定形]+[te-第2不定詞]

Lês dat formulier *foar't* jo *begjinne te skriuwen*. 「書き始める前にその用紙に目を通しなさい」(ULF'S, C 10: 11)

Sadree't it *begjint te winterjen*, wurdt der praat oer dizze Fryske iismaraton. 「冬になるとすぐに、このフリースラントのマラソンのことが話題になる」(ULF'S, B 5: 7)

(e) 従属文：動詞三つ

① 話法の助動詞 定形

- i) [補文標識]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

Ik hie net tocht, *dat* ik nochris *fotografearje kinne soe*. 「私はもう一度、写真がとれるなんて思ってもみなかった」(ULI'S, B 19: 26)

- ii) [補文標識]…[過去分詞]+[完了の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

Freegie ris, *hoe't* dat dan *west hawwe soe*. 「それではそれがどうだったのだろうか、ちょっと質問してみなさい」(ULI'S, C 12: 21)

- iii) [補文標識]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

Dykstra frege *oft* der noch net ris *besjoen wurde koe oft* de dyk net noch wat fierder fan it doarp ôf komme koe te lizzen. 「ディクストラはその道がもう少し村から離れたところに位置するようになることができるかどうか、まだ検討される余地はないかと質問した」(ULI'S, C 8: 12)

- iv) [補文標識]…[libje 第 2 不定詞]+[bliuwe 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

Hy hope *dat* er noch in skoftsje *libjen bliuwe mocht*. 「彼はもうしばらく生きていることを許されるようにと願った」(ULI'S, B 20: 10)

- v) [補文標識]…[te-第 2 不定詞]+[wêze 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

Yn 'e tekst wurdt praat fan allegear dingen *dy't* yn Fryslân net maklik *te finen wêze sille*. 「テキストにはフリースラントでは簡単には見つからないようなものばかりが話題になっている」(ULI'S, B 20: 22)

- vi) [補文標識]…[komme 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]+[te-第 2 不定詞]

Dykstra frege *oft* der noch net ris *besjoen wurde koe oft* de dyk net

noch wat fierder fan it doarp ôf *komme koe te lizzen*. 「ディクストラはその道がもう少し村から離れたところに位置するようになることができるかどうか、まだ検討される余地はないかと質問した」(ULI'S, C 8: 12)

② 完了の助動詞 定形

- i) [補文標識]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]

Wy tochten *datsto* dat wol *meitsje kinnen hiest*. 「私たちは君にはそれを作ることができただろうにと思った」(ULI'S, B 19: 25 変更)

Ik wist net, *dat* ik dat al foar 1 septimber *dwaan moatten hie*. 「私はそれをすでに 9 月 1 日以前にやっていなければならなかったとは知らなかった」(ULI'S, B 19: 26)

De kursus, *dêr't* jim oan *meidwaan wollen hiene*, kin spitigernôch net trochgean. 「あなたがたがいつしよに受講したいと思っていた講習は、残念ながら行なわれません」(ULI'S, B 19: 26)

Do mienste, *dat* hy dy *helpe wollen hie*. 「君は彼が本当は君を助けたかったと思ったんだね」(ULI'S, C 12: 21)

- ii) [補文標識]…[第 2 不定詞]+[leare 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]

Lêze docht elkenien *dy't lêzen leard hat*, ôf yn in boek ôf yn in krante ôf op 'e televyzje. 「読むのは、本か新聞かテレビで読むことを習った人はだれでもする」(ULI'S, B 16: 9 変更)

- iii) [補文標識]…[komme 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]+[te-第 2 不定詞]

It die him nij, *dat* wy net *kommen wiene te sjen*. 「私たちが見に来なかったのは、彼にとっては驚きだった」(ULI'S, C 12: 21)

③ 受動の助動詞 定形

[補文標識]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 過去分詞]+[受動の助動詞 定形]

Hy seit *dat* de bern *rinne litten wurde*. 「彼は子供たちは歩かされてい

ると言っている」(Hoekstra 1987: 14 変更)

④ bliuwe 定形

[補文標識]…[sitte 第 2 不定詞]+[bliuwe 定形]+[te-第 2 不定詞]

Asto dêr mar yn in hoekje sitten bliuwst te kniezen, komst der nea tusken. 「もし君がただそこの隅でふさぎこんでいたままだったら、仲間に (= その間に) 入ることはけっしてないよ」(ULFS, B 19: 26 変更)

(f) 従属文：動詞四つ

① 話法の助動詞 定形

[補文標識]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

As ik dat dwaan mochten hawwe soe, wie alles noch goed ôfrûn. 「もし私がそれをしてもよかったのなら、すべてはうまく過ぎただろうに」(ULFS, C 12: 13)

② 完了の助動詞 定形

[補文標識]…[sitte 第 2 不定詞]+[bliuwe 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]

Wa seit, dat ik dêr sitten bliuwe moatten hie. 「私は本当はそこですわったままでいなければならなかったのに、なんてことをだれが言うてるんだ」(ULFS, B 19: 5)

(5) オランダ語との比較

西フリジア語の動詞群の語順をオランダ語と比較して例示する。オランダ語の用例はもっとも規範的な語順だけを示す。

(a) 主文：動詞三つ

① 話法の助動詞 定形

- i) フ. [話法の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]
オ. [話法の助動詞 定形]…[話法の助動詞 不定詞]+[不定詞]

フ. *Heit soe wol graach in eigen hûs hawwe wolle*. 「父はおそらくマ

イホームを持ちたいと思うだろう」(ULI'S, A 11: 2)

オ. *Vader zou wel graag een eigen huis willen hebben.* 「同上」(ULI'S, A 11: 11)

フ. *Hja soene jild liene moatte.* 「彼らはお金を借りる必要があるかもしれない」(ULI'S, A 11: 2)

オ. *Ze zouden geld moeten lenen.* 「同上」(ULI'S, A 11: 11)

ii) フ. [話法の助動詞 定形]…[第1不定詞]+[使役の助動詞 第1不定詞]

オ. [話法の助動詞 定形]…[使役の助動詞 不定詞]+[不定詞]

フ. *Ik sil jimme ris wat sjen litte.* 「私は君たちにちょっと何か見せてあげよう」(ULI'S, B 12: 7 変更)

オ. *Ik zal jullie eens wat laten zien.* 「同上」(ULI'S, B 12: 16 変更)

iii) フ. [話法の助動詞 定形]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第1不定詞]

オ. [話法の助動詞 定形]…[受動の助動詞 不定詞]+[過去分詞]

フ. *Brea mocht ek net fuortsmitten wurde om't dat sûnde wie.* 「(ライ麦) パンは捨ててもいけなかった (= 捨てられてもいけなかった)。なぜなら、それは罪だったからである」(Bosma-Banning 1981²: 137)

オ. *Brood mocht ook niet worden weggegooid omdat dat zonde was.* 「同上」(ib. 137 変更)

② 完了の助動詞 定形

i) フ. [完了の助動詞 定形]…[第1不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]

オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[不定詞]

フ. *Sy ha net allinnich gean wollen.* 「彼らは自分たちだけで行きたくなかったのだ」(ULI'S, C 12: 19)

オ. *Zij hebben niet alleen willen gaan.* 「同上」(ULI'S, C 12: 5)

フ. *Sy hat dat sizze wollen.* 「彼女はそれを言いたかったのです」(ULI'S, B 12: 15 変更)

オ. *Zij heeft dat willen zeggen.* 「同上」(ULI'S, B 12: 5)

フ. *Pyt hie wol komme kinnen.* 「ピトは来ることができたはずなのに」(ULI'S, C 13: 19)

- オ. Piet *had* wel *kunnen* *komen*. 「同上」 (ULI'S, C 13: 5)
- フ. Ik *hie* dat *dwaan* *sillen*. 「私はそれをすべきだったかもしれない」
(ULI'S, B 12: 15)
- オ. Ik *had* dat *zullen* *doen*. 「同上」 (ULI'S, B 12: 5)
- フ. Hy *hie* dat *graach* *dwaan* *wollen*. 「彼は本当はそれをやりたかったのだ」 (ULI'S, C 12: 13)
- オ. Hij *had* dat *graag* *willen* *doen*. 「同上」 (ULI'S, C 12: 13)
- フ. Nimmen *hie* it *weagje* *doard*. 「だれもあえてそれをしようとしなかった」 (ULI'S, C 12: 21 変更)
- オ. Niemand *had* het *durven* *wagen*. 「同上」 (ULI'S, C 12: 13)
- ii) フ. [完了の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 過去分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[使役の助動詞 代替不定詞]+[不定詞]
フ. Us mem *hat* it *ús* *sjen* *litten*. 「母はそれを私たちに見せたかったです」 (ULI'S, C 12: 19)
- オ. Moeder *heeft* het ons *laten* *zien*. 「同上」 (ULI'S, C 12: 5)
- iii) フ. [完了の助動詞 定形]…[第 2 不定詞]+[gean 過去分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[gaan 代替不定詞]+[不定詞]
フ. Wêrom *bisto* dêr *stean* *gien*? 「なぜ君はそこで立ち上がったのか」
(ULI'S, B 15: 21)
- オ. Waarom *ben* je daar *gaan* *staan*? 「同上」 (ULI'S, B 15: 13)
- ③ bliuwe/blijven 定形
フ. [bliuwe 定形]…[stean 第 2 不定詞]+[te-第 2 不定詞]
オ. [blijven 定形]…[staan 不定詞]+[不定詞]
フ. De hûn *bliuwt* hjir *stean* *te* *wachtsjen*. 「犬はここで立って待ち続けている (=待つために立ち続けている)」 (ULI'S, B 15: 21)
オ. De hond *blijft* hier *staan* *wachten*. 「同上」 (ULI'S, B 15: 13)

(b) 主文：動詞四つ

① 話法の助動詞 定形

i) フ. [話法の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]

オ. [話法の助動詞 定形]…[話法の助動詞 不定詞]+[話法の助動詞 不定詞]+[第 1 不定詞]

フ. *Men soe it smoken litte kinne moatte*. 「タバコはやめることができなくてはならないだろう」(ULI'S, B 12: 17 変更)

オ. *Je zou roken moeten kunnen laten*. 「同上」(ULI'S, B 12: 14)

ii) フ. [話法の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]

オ. [話法の助動詞 定形]…[話法の助動詞 不定詞]+[使役の助動詞 不定詞]+[不定詞]

フ. *Wy moatte him komme litte kinne*. 「私たちは彼を来させることができなければならない」(Popkema 1987: 50 変更)

オ. *Wij moeten hem kunnen laten komen*. 「同上」(ib. 50 変更)

フ. *Wy sille de fûgels net oer it net fleane litte moatte*. 「私たちは鳥を網より上に飛ばしてはならないだろう(=好機を逃すな。ことわざ)」(Bosma-Banning 1981²: 111)

オ. *We zullen de vogels niet over het net moeten laten vliegen*. 「同上」(ib. 111)

iii) フ. [話法の助動詞 定形]…[第 1 不定詞]+[使役の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 第 1 不定詞]

オ. [話法の助動詞 定形]…[完了の助動詞 不定詞]+[使役の助動詞 代替不定詞]+[不定詞]

フ. *Hja koe in ferske sjonge litten hawwe*. 「彼女は詩歌を歌わせたかもしれない」(Popkema 1987: 50 変更)

オ. *Zij kon een versje hebben laten zingen*. 「同上」(ib. 50 変更)

iv) フ. [話法の助動詞 定形]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第 1 不定詞]+

[話法の助動詞 第1不定詞]

- オ. [話法の助動詞 定形]…[話法の助動詞 不定詞]+[受動の助動詞 不定詞]+[過去分詞]
- フ. *Dy stoel moat makke wurde kinne.* 「あのいすは作られることができるにちがいない・できなければならない」(Popkema 1987: 50)
- オ. *Die stoel moet kunnen worden gemaakt.* 「同上」(ib. 50 変更)
- フ. *It wurk sil better dien wurde moatte.* 「その仕事はもっと良くなされる必要があるだろう」(Eisma 1989: 21)
- オ. *Het werk zal beter moeten worden gedaan.* 「同上」(ib. 22)
- v) フ. [話法の助動詞 定形]…[sitte 第2不定詞]+[bliuwe 第1不定詞]+[話法の助動詞 第1不定詞]
- オ. [話法の助動詞 定形]…[話法の助動詞 不定詞]+[blijven 不定詞]+[zitten 不定詞]
- フ. *Ik sil hjir wol sitten bliuwe moatte.* 「私はたぶんここですわっていなければならないだろう」(ib. 21)
- オ. *Ik zal hier wel moeten blijven zitten.* 「同上」(ib. 22)

② 完了の助動詞 定形

- i) フ. [完了の助動詞 定形]…[第1不定詞]+[使役の助動詞 第1不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]
- オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[使役の助動詞 不定詞]+[不定詞]
- フ. *Hja hat in ferske sjonge litte kinnen.* 「彼女は詩歌を歌わせることができた」(Popkema 1987: 50 変更)
- オ. *Zij heeft een versje kunnen laten zingen.* 「同上」(ib. 50 変更)
- フ. *Do hiest dat boek better lizze litte kinnen.* 「おまえはその本をもっとちゃんとしまっておくことができてもよかったのに」(ULF'S, B 18: 9)
- オ. *Je had dat boek beter kunnen laten liggen.* 「同上」(ULF'S, B 18: 19)

- ii) フ. [完了の助動詞 定形]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第1不定詞]+
[話法の助動詞 過去分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[受動の助動
詞 不定詞]+[過去分詞]
フ. *It wurk hie better dien wurde moatten.* 「その仕事はもっと良くな
される必要があったのに」(Eisma 1989: 21)
オ. *Het werk had beter moeten worden gedaan.* 「同上」(ib. 22)
フ. *Dy stoel hie makke wurde kinnen.* 「あのいすは作られることがで
きただろうに」(Popkema 1987: 50)
オ. *Die stoel had kunnen worden gemaakt.* 「同上」(ib. 50 変更)
iii) フ. [完了の助動詞 定形]…[sitte 第2不定詞]+[bliuwe 第1不定詞]+
[話法の助動詞 過去分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[blijven 不定
詞]+[zitten 不定詞]
フ. *Hy hie op dat plak sitten bliuwe moatten.* 「彼はその場所に腰を下
ろしていなければならなかった」(ULP'S, C 13: 19)
オ. *Hij had op die plaats moeten blijven zitten.* 「同上」(ULP'S, C 13:
5)

(c) 主文：動詞五つ

完了の助動詞 定形

- i) フ. [完了の助動詞 定形]…[第1不定詞]+[使役の助動詞 第1不定
詞]+[話法の助動詞 第1不定詞]+[話法の助動詞 完了分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[話法の助動
詞 不定詞]+[使役の助動詞 不定詞]+[不定詞]
フ. *Wy hiene him komme litte kinne moatten.* 「私たちは彼を来させる
ことができなければならなかったのだが」(Popkema 1987: 50 変更)
オ. *Wij hadden hem moeten kunnen laten komen.* 「同上」(ib. 50 変
更)

- ii) フ. [完了の助動詞 定形]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第1不定詞]+
[話法の助動詞 第1不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[話法の助動
詞 不定詞]+[受動の助動詞 不定詞]+[過去分詞]
フ. *Dy stoel hie makke wurde kinne moatten.* 「あのいすは作られるこ
とができなければならなかったのに」 (ib. 50)
オ. *Die stoel had moeten kunnen worden gemaakt.* 「同上」 (ib. 50 変
更)
- iii) フ. [完了の助動詞 定形]…[sitte 第2不定詞]+[bliuwe 第1不定詞]+
[話法の助動詞 第1不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[話法の助動
詞 不定詞]+[blijven 不定詞]+[zitten 不定詞]
フ. *Hy hie sitten bliuwe kinne moatten.* 「彼はすわったままでいるこ
とができなければならなかったのに」 (Popkema 1987: 50 変更)
オ. *Hij had moeten kunnen blijven zitten.* 「同上」 (50 変更)
- iv) フ. [完了の助動詞 定形]…[sitte 第2不定詞]+[bliuwe 第1不定詞]+
[使役の助動詞 第1不定詞]+[話法の助動詞 完了分詞]
オ. [完了の助動詞 定形]…[話法の助動詞 代替不定詞]+[使役の助動
詞 不定詞]+[bljiven 不定詞]+[zitten 不定詞]
フ. *Ik haw har sitten bliuwe litte kinnen.* 「私は彼女をすわったままで
いさせることができた」 (Popekam 1987: 50 変更)
オ. *Ik heb har kunnen laten blijven zitten.* 「同上」 (ib. 50 変更)

(d) 従属文：動詞二つ

① 話法の助動詞 定形

- フ. [補文標識]…[第1不定詞]+[話法の助動詞 定形]
オ. [補文標識]…[話法の助動詞 定形]+[不定詞]
フ. *Sy is der net wis fan, oft se dat wol betelje kin.* 「彼女はそれを支
払うことができるか確信がない」 (ULFS, B 19: 24)

- オ. Zij is er niet zeker van, *of* ze dat wel *kan betalen*. 「同上」(ULI'S, B 19: 16)
- フ. Ik hie net tocht *datsto skilderje koest*. 「私は君が絵をかけるなんて思わなかった」(ULI'S, B 19: 26 変更)
- オ. Ik had niet gedacht, *dat* jij *kon schilderen*. 「同上」(ULI'S, B 19: 22)
- フ. Wy dogge *wat* wy *dwaan moatte*. 「私たちは自分たちがしなければならないことをします」(ULI'S, B 16: 13)
- オ. Wij doen *wat* wij *moeten doen*. 「同上」(ULI'S, B 16: 13)
- フ. Hy wit net, oft er dat nije, djoere boek *keapje sil*. 「彼はその新しい高価な本を買うかどうかわからない」(ULI'S, B 19: 24)
- オ. Hij weet niet, of hij dat nieuwe, dure boek *zal kopen*. 「同上」(ULI'S, B 19: 16)
- フ. Ik sei, dat ik wol graach in kursus *folgje woe*. 「私は講習を受講したいと言いました」(ULI'S, B 19: 15)
- オ. Ik zei, dat ik wel graag een kursus *wilde volgen*. 「同上」(ULI'S, B 19: 15 変更)

② 完了の助動詞 定形

- フ. [補文標識]…[過去分詞]+[完了の助動詞 定形]
- オ. [補文標識]…[完了の助動詞 定形]+[過去分詞]
- フ. Wa seit, *dat* se dat om 'e nocht *besocht hawwe?* 「あの人たちがそれをしようとしたのはむだだった(=空しく試みた)などと、だれが言っているのですか」(ULI'S, B 19: 24)
- オ. Wie zegt, *dat* zij dat tevergeefs *hebben geprobeerd?* 「同上」(ULI'S, B 19: 16)
- フ. Ik sei *dat* ik it net *heard hie*. 「私はそれを聞いていなかったと言ったのです」(ULI'S, C 12: 13)
- オ. Ik zei *dat* ik het niet *had gehoord*. 「同上」(ULI'S, C 12: 13 変更)
- フ. Hy woe, dat er dat skilderij *kocht hie*. 「彼はその絵を買いたかつ

たのにと思った」(ULI'S, B 19: 15)

オ. Hij wou, dat hij dat schilderij *had gekocht*. 「同上」(ULI'S, B 19: 15)

③ wêze/zijn 定形

フ. [補文標識]…[te-第2不定詞]+[wêze 定形]

オ. [補文標識]…[te-不定詞]+[zijn 定形]

フ. Wy sjogge alles *wat der te sjen is*. 「私たちは見られるものはすべて見えています」(ULI'S, B 16: 13)

オ. Wij zien alles *wat er te zien is*. 「同上」(ULI'S, B 16: 13 変更)

(e) 従属文：動詞三つ

① 話法の助動詞 定形

i) フ. [補文標識]…[第1不定詞]+[話法の助動詞 第1不定詞]+[話法の助動詞 定形]

オ. [補文標識]…[話法の助動詞 定形]+[話法の助動詞 不定詞]+[不定詞]

フ. Ik hie net tocht, *dat ik nochris fotografearje kinne soe*. 「私はもう一度、写真がとれるなんて思ってもみなかった」(ULI'S, B 19: 26)

オ. Ik had niet gedacht, *dat ik nog eens zou kunnen fotograferen*. 「同上」(ULI'S, B 19: 22)

ii) フ. [補文標識]…[steane/sitte 第2不定詞]+[bliuwe 第1不定詞]+[話法の助動詞 定形]

オ. [補文標識]…[話法の助動詞 定形]+[blijven 不定詞]+[staan/zitten 不定詞]

フ. *Omdat* er dêr net langer *steane bliuwe woe*, gyng er nei hûs. 「そこにもうそれ以上とどまりたくなかった(=立ったままでいたくなかった)ので、彼は家に帰った」(ULI'S, C 12: 13)

オ. *Omdat* hij daar niet langer *wilde blijven staan*, ging hij naar huis. 「同上」(ULI'S, C 12: 13)

フ. Tochtsto, *dat ik sa lang stil sitten bliuwe koe?* 「あなたは私がそんなに長い間, じっとすわっていられると思っていたのですか」
(ULI'S, B 19: 25)

オ. Dacht jij, *dat ik zo lang stil kon blijven zitten?* 「同上」(ULI'S, B 19: 17)

② 完了の助動詞 定形

i) フ. [補文標識]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]

オ. [補文標識]…[完了の助動詞 定形]+[話法の助動詞 代替不定詞]+[不定詞]

フ. Wy tochten *datsto* dat wol *meitsje kinnen hiest*. 「私たちは君ならそれを作ることができただろうにと思いました」(ULI'S, B 19: 25 変更)

オ. Wij dachten, *dat jij dat wel had kunnen maken*. 「同上」(ULI'S, B 19: 25)

フ. Ik wist net, *dat ik dat al foar 1 septimber dwaan moatten hie*. 「私はそれをすでに 9 月 1 日以前にやっていなければならなかったとは知らなかった」(ULI'S, B 19: 26)

オ. Ik wist niet, *dat ik dat al voor 1 september had moeten doen*. 「同上」(ULI'S, B 19: 22)

フ. *Wêrom't ik dêr sa lang oan wurkje moatten ha*, wit ik sels ek net. 「なぜそんなに長い間, その仕事をしなければならなかったか, 私は自分でもわからない」(ULI'S, B 19: 25 変更)

オ. *Waarom ik daaraan zo lang heb moeten werken*, weet ik zelf ook niet. 「同上」(ULI'S, B 19: 17 変更)

フ. Do miendest, *dat hy dy helpe wollen hie*. 「君は彼が本当は君を助けたかったと思ったんだね」(ULI'S, C 12: 21)

オ. Jij meende, *dat hij je had willen helpen*. 「同上」(ULI'S, C 12: 13)

フ. Hy sei, *dat er dat skilderij wol keapje wollen hie*. 「彼はその絵を

- 買いたかったのにと言った」(ULI'S, B 19: 16)
- オ. Hij zei, *dat* hij *dat* *schilderij* *wel had willen kopen*.「同上」(ULI'S, B 19: 16)
- フ. Klaas sei, *dat* er *lêze wollen hie*.「クラスは自分は読みたかったのにと言った」(ULI'S, C 13: 19)
- オ. Klaas zei, *dat* hij *had willen lezen*.「同上」(ULI'S, C 13: 5)
- フ. *Doe't er it weagje doarst hie* in stikje te ymprovisearjen, fielded er him in stik frijer.「一曲、あえて即興演奏をしてみようと思ったら、彼は少し気持ちが楽になった」(ULI'S, B 19: 26 変更)
- オ. *Toen* hij het *had durven wagen* een stukje te improviseren, voelde hij zich een stuk frijer.「同上」(ULI'S, B 19: 22)
- ii) フ. [補文標識]…[第1 不定詞]+[使役の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]
- オ. [補文標識]…[完了の助動詞 定形]+[使役の助動詞 代替不定詞]+[不定詞]
- フ. Wy sjogge, *dat* se har wurdboek *lizze litten hat*.「私たちは彼女が自分の辞書を置いたままにしたのがわかります」(Eisma 1989: 21 変更)
- オ. Wij zien, *dat* ze haar woordenboek *heeft laten liggen*.「同上」(ib. 21 変更)
- iii) フ. [補文標識]…[過去分詞]+[wêze 定形]+[te-第2 不定詞]
- オ. [補文標識]…[zijn 定形]+[代替不定詞]+[不定詞]
- フ. It die him nij, *dat* wy net *kommen wiene te sjen*.「私たちが見に来なかったのは、彼にとっては驚きだった」(ULI'S, C 12: 21)
- オ. Het verwonderde hem, *dat* wij niet *waren komen kijken*.「同上」(ULI'S, C 12: 13)
- フ. *Dat* hy noch nea *kommen wie te sjen*, fernuvered my.「彼がけっして姿を見せに来なかったのは、私には驚きだった」(ULI'S, B 19: 25)
- オ. *Dat* hij nog nooit *was komen kijken*, verbaasde mij.「同上」(ULI'S,

B 19: 17)

③ bliuwe/blijven 定形

フ．[補文標識]…[sitte 第 2 不定詞]+[bliuwe 定形]+[te-第 2 不定詞]

オ．[補文標識]…[blijven 定形]+[zitten 不定詞]+[不定詞]

フ．*Asto dêr mar yn in hoekje sitten bliuwt te kniezen*, komst der nea tusken.「もし君がただその隅でふさぎこんでいたままだったら、仲間に（＝その間に）入ることはけっしてないよ」（ULI'S, B 19: 26 変更）

オ．*Als je daar maar in een hoekje blijft zitten kniezen*, kom je er nooit tussen.「同上」（ULI'S, B 19: 22）

(f) 従属文：動詞四つ

① 話法の助動詞 定形

i) フ．[補文標識]…[第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

オ．[補文標識]…[話法の助動詞 定形]+[完了の助動詞 不定詞]+[話法の助動詞 代替不定詞]+[不定詞]

フ．*As ik dat dwaan mochten hawwe soe*, wie alles noch goed ôfrûn.「もし私がそれをしてもよかったのなら、すべてはうまく過ぎただろうに」（ULI'S, C 12: 13）

オ．*Als ik dat zou hebben mogen doen*, was alles nog goed afgelopen.「同上」（ULI'S, C 12: 13）

ii) フ．[補文標識]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]

オ．[補文標識]…[話法の助動詞 定形]+[話法の助動詞 不定詞]+[受動の助動詞 不定詞]+[過去分詞]

フ．*Hja seit, dat it wurk better dien wurde moatte sil*.「彼女はその仕事はもっとと良くなされる必要があるだろうと言っている」（Eisma 1989: 19 変更）

- オ. Zij zegt, *dat het werk beter zal moeten worden gedaan*. 「同上」
(ib. 20 変更)
- iii) フ. [補文標識]…[sitte 第 2 不定詞]+[bliuwe 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 定形]
- オ. [補文標識]…[話法の助動詞 定形]+[話法の助動詞 不定詞]+[blijven 不定詞]+[zitten 不定詞]
- フ. Ik tink, *dat er dêr wol sitten bliuwe moatte sil*. 「私は彼はそこにすわり続けなければいけないだろうと思います」 (ib. 19 変更)
- オ. Ik denk, *dat hij daar wel zal moeten blijven zitten*. 「同上」 (ib. 20 変更)
- ② 完了の助動詞 定形
- i) フ. [補文標識]…[過去分詞]+[受動の助動詞 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]
- オ. [補文標識]…[完了の助動詞 定形]+[話法の助動詞 代替不定詞]+[受動の助動詞 不定詞]+[過去分詞]
- フ. Hja seit, *dat it wurk better dien wurde moatten hie*. 「彼女はその仕事はもっと良くなされる必要があったのと言っている」 (ib. 19 変更)
- オ. Zij zegt, *dat het werk beter had moeten worden gedaan*. 「同上」
(ib. 20 変更)
- ii) フ. [補文標識]…[sitte 第 2 不定詞]+[bliuwe 第 1 不定詞]+[話法の助動詞 過去分詞]+[完了の助動詞 定形]
- オ. [補文標識]…[完了の助動詞 定形]+[話法の助動詞 代替不定詞]+[blijven 不定詞]+[zitten 不定詞]
- フ. Hy miende, *dat hy dêr sitten bliuwe moatten hie*. 「彼はそこですわったままでいなければならなかったのかと思った」 (ULF'S, C 12: 21)
- オ. Hij meende, *dat hij daar had moeten blijven zitten*. 「同上」 (ULF'S, C 12: 13)

フ. Ik tocht, *datsto dêr sitten bliuwe wollen hiest*. 「私は君がそこにす
わったままでいたかったのかと思った」(ULI'S, B 19: 16)

オ. Ik dacht, *dat jij daar had willen blijven zitten*. 「同上」(ULI'S, B
19: 16)

§ 100 否定詞 *net* と二重否定 (*dûbele ûntkenning*) <補足>

(1) 否定詞 *net* の用法

不定冠詞がついた名詞句や無冠詞の名詞句を含む動詞句を否定するとき
否定冠詞 *gjin*(オ. *geen*/ド. *kein*/エ. *no*)を前置することは、すでに§ 28 で
述べた。

定冠詞や指示・所有代名詞がついた名詞を含む動詞句を否定するときには、
否定詞 *net* (オ. *niet*/ド. *nicht*/エ. *not*)を用いる。

Ik wit *it antwurd net*. 「私はその答えがわかりません」

Ik ken *har âlden net*. 「私は彼女の両親を知りません」

この場合、*net* を名詞句の前に置くと、その名詞句そのものを否定し、対比
の意味になる。したがって、対比を表わす文成分が続かないと不自然である。

Ik ken *net har âlden*, mar wol har pake en beppe. 「私は彼女の両親は
知りませんが、彼女の祖父母は知っています」

このように、否定詞 *net* は否定の焦点(エ. *focus*)となる作用域(エ.
negative scope)の直前に置くことができる。それは語でも句でも文でもかま
わない。たとえば、次の用例では否定詞 *net* が後続の従属文全体を作用域とし
て否定している。

Net [dat ús flagge, sa't wy dy kenne, fan dy tiid is]. 「私たちが知って
いるような私たちの旗がその時代のものというわけではありません」
(ULI'S, C 20: 8)

次の慣用句に注意。

net dat ik wit 「私が知っている範囲では」

焦点となる要素を前域に置けば、否定詞 *net* をその直前に置かなくてもそ
の要素を話題化して否定することになり、他との対比を含意する必要はない。

Har âlden ken ik net. 「彼女の両親は私は知りません」

否定詞 *net* の位置による意味的相違の例として、*net alles* では *alles* 「すべてのこと」が否定の作用域になるので部分否定の意味になるが、*alles net* では *alles* が否定の作用域の外にあるので、全否定の意味になる。

Men kin net alles witte. 「何でも知っていることはできない」(部分否定) (Bosma-Banning 1981²: 139)

Men kin alles net witte. 「何も知ることができない」(全否定)

次の例では否定詞 *net* は文末に置かれ、文否定である。

Hy komt moarn net. 「彼は明日、来ない」

この場合、否定詞 *net* を副詞 *moarn* 「明日」の前に置くと、上述のように *moarn* 「明日」が否定の作用域になり、対比の意味になる。したがって、対比を表わす文成分が続かないと不自然である。

Hy komt net moarn, mar oaremoarn. 「彼は明日ではなく、明後日に来ます」

moarn 「明日」を前域に置けば話題化がなされ、他との対比を含意する必要はない。

Moarn komt er net. 「明日は、彼は来ません」

否定詞 *net* を文末に置くのは文否定の意味に解釈されるが、じつは動詞句の意味を否定しており、それが文全体の意味を否定していることにつながる。じじつ、動詞と意味的に密接に結びつく文成分がある場合には、ふつうその直前に *net* を置く。次例のように、分離動詞の分離成分、助動詞に支配された過去分詞や不定詞、述語形容詞や動詞と結びつきの強い前置詞句がそれにあたる。

Hy jout it net op. 「彼はそれをあきらめない」(*opjaan* 「あきらめる」)

Hy is noch net oankommen. 「彼はまだ到着していない」(*oankomme* 「到着する」)

In fêste regel is hast net ôf te lieden. 「確固たる規則はほとんど導き出され得ない」(ULI'S, C 5: 13)

Ik bin noch net klear. 「私はまだ用意ができていない」(*klear wêze* 「用

意ができている)」

Hy antwurdet *net op myn fraach*. 「彼は私の質問に答えない」
(antwurdzje 「答える (op …に)」) (ULI'S, C 4: 20)

As it in pear dagen *net op 'e tafel* stiet, mist gjinien it. 「それが二三日食卓にないと、気がつかない人はいない」(stean「立っている, ある (op …の上に)」) (Bangma 1993²: 87)

次例では等位接続によって動詞が省略されている。

As bern mochten wy oeral mei boartsje, mei brea of bôle lykwols *net*.
「子供のころ, 私たちは何でも遊んでよかったのですが, ライ麦パンと白パンでだけは(遊んでは) いけませんでした」(Bosma-Banning 1981²: 137)

次例のように, 無冠詞の名詞句にもかかわらず否定冠詞 *gjin* をつけずに否定詞 *net* で否定しているのは, Frysk prate「フリジア語を話す」が「名詞句＋動詞」のような動詞句ではなく, ひとつの複合動詞のような性格を持っているためである。

Hy kin *net* [Frysk prate]. 「彼はフリジア語が話せない」(ib. 143)

(2) 否定詞 *net* と関連表現

(a) 否定疑問文・付加疑問文

否定詞 *net* を伴う疑問文は, *net* を除く発話内容を強く肯定する否定疑問文になる。

Wa ken de waadeilannen *net*? 「だれがヴァート諸島 (= 北海沿岸の遠浅の干潟地帯に沿って浮かぶ島々) を知らないだろうか (= だれでも知っているはずだ)」(ULI'S, C 9: 12)

否定詞 *net* を文が終わった後にさらに添えて, 疑問のイントネーションで発話すれば, 相手の同意を期待する付加疑問文になる。

Wat is it hjir feroare, *net*? 「ここは何て変わったんだろう, ねえ?」
(Bosma-Banning 1981²: 21)

否定詞 *net* を含む次のような付加疑問文の表現もある。

Wat wie 't hjoed moai waar, {*net/oars net/is 't net sa/is 't sa net/net wier*}? 「今日は何ていい天気なんだろう、ねえ」 (Zantema 1984: 650)

(b) 否定代名詞 *neat/niks* 「何も…ない」

neat/niks はふつうは「何も…ない」の意味で否定代名詞として用いる。

Utfanhûzjen is *neat* foar my. 「外泊は私向きではない (=私にとって何事でもない)」 (ULI'S, A 19: 19)

Dat berjocht wit ik *neat* fan. 「その報告について私は何も知らない」 (Zantema 1984: 1198)

Wie de molke soer? — Wy preauwen *neat*. 「ミルクは酸っぱかった?」「私たちは何も口にしていなわ」 (Bosma-Banning 1981²: 113)

As elts sines kriget, hat de duvel *neat*. 「各人が自分のもの (=分け前) をもらえば、悪魔は何も持たない (=争いが起こらない。ことわざ)」 (Beintema 1990: 30)

Der wurdt net foar *neat* sein: hoe âlder, hoe gekker. 「よく言ったもんですね (=何も無いことについては言われることがない), 年を取れば取るほどおめでたくなるっていうのは」 (ULI'S, A 17: 10)

neat は代名詞としての文成分の役割を果たさずに、たんに否定詞 *net* の強調として用いることがある。

Hy liket *neat* op syn heit. 「彼は父親に全然似ていない」 (Dykstra 2000: 427)

neat は (3) で述べる二重否定でも多用する。

(c) ゼロ属格の *fan* と否定詞 (§ 60 (2)(g)②)

次のような表現で前置詞 *fan* (オ. *van*/ド. *von*/エ. *of*) とともに否定詞 *net* を用いることがある。

Ik tocht *fan net*. 「私はそうは思わないんだけど」 (Dykstra 2000: 434)

Ik hoopje *fan net*. 「私はそうは希望しません」 (ib. 434)

これは不定代名詞 *wat/eat* 「何か」と「代名詞の *der*」に相当する要素を補えば、‘{*wat/eat*} *der*…」 *fan* 「(それについて何かは)」 *net* 「(…ない)」という「部分の表現」になると考えることができる。つまり、「不定代名詞+前

置詞句」の中で前置詞だけが残った表現とみなすことができ、本稿ではこの fan を「ゼロ属格の fan」と呼ぶことにする。Ik {hoopje/tocht} net. だけでは、「私は {考えない/望まない}」という漠然とした思考を表わすか、「私は {何も考えない/何も望まない}」という全面的な否定表現になるが、ゼロ属格の fan による上記の表現は話題になっている特定の物事に限定して、「その物事にかんしては何も…ない」という否定の意味になると考えられる。この表現についてはさらに考察を必要とする。

(3) 二重否定と虚辞の net

(a) 二重否定（多重否定）：否定の強調

西フリジア語では否定詞 net あるいは否定冠詞 gjin とともに他の否定詞 (nea/noait「けっして…ない」、nimmen「だれも…ない」、neat「何も…ない」、nearne「どこにも…ない」、nearne…前置詞「何も…ない」) を重ねることがあり、これを「二重否定」(dûbele ûntkenning) と呼ぶ。ただし、西フリジア語では二重否定は強い肯定の意味にはならず、否定の意味を強調する。

以下にいくつか用例を示す。

① 否定詞+net

Ik ha *nea net* witten, dat sy sa alderheislikste moai kantsklosse koe.
「私は彼女がそんなにものすごく上手にレース編みができるとはまったく知らなかった」(ULI'S, B 19: 14)

60% joech op *nea net* oanspraak yn 'e 3de persoan te brûken tsjin "frjemden". 「60%が『よそ者たち』にたいしてはけっして3人称での呼びかけを用いないと回答した」(De Boer 1986: 111 (VII))

Dat liket my *neat net* goed ta. 「それは私には全然良く思えない」
(Dykstra 2000: 427)

De duwel en *nimmen net* hawwe in bulte kwea dien. 「悪魔も、そして、誰ひとりとして多くの悪事を犯さなかった(=だれでも責任は取ろうとせず、他人に押し付けたがるものだ。ことわざ)」(Beintema 1990: 30)

Ik kin it *nearne net* fine. 「私はそれをどこにも見つけれられない」
(Stienstra 1982: 78)

Dat liket *nearne net* nei. 「それは何にも似ていない」 (Tamminga 1963: 7)

② 否定詞 + *gjin*

Ik ha der *neat gjin* sin oan om fuort. 「私は立ち去る気にはまったくくない」 (Sipma 1949a: 51)

It is *neat gjin* muoite. 「それは何の手間でもない」 (Stienstra 1982: 78)

Us Jelle hat oars *noait gjin* liger west. 「それにうちのイエレは嘘つきだったことは一度だってありません」 (Tamminga 1963: 7)

次の文は多重否定の用例である。

En *gjinien* hat *noait gjin* taal *noch* teken wer fan de man heard. 「だれもその男の人からけっして二度と何の消息も (= 話もしるしも) 聞くことはなかった」 (ib. 6)

(noch) A noch B 「A も B も…ない」はAとBの両方について否定の意味を表わす (オ. (noch) A noch B / ド. weder A noch B / エ. neither A nor B)。

Noch syn frou *noch* syn soan wist(en) wêr't er wie. 「彼の妻も彼の息子も彼がどこにいるのか、わからなかった」 (Dykstra 2000: 440 変更)

この *noch* はさらに他の否定詞とともに用いて、二重否定の表現を形成することがある。

Wy hawwe iten *noch neat* yn 'e hûs. 「私たちはうちには食べる物も何もありません」 (Tamminga 1963: 7)

Sokke bern ha (*neat*) *gjin* noeden *noch* soargen. 「そんな子供たちは何の心配も (= 気遣いも心配も) しない」 (ib. 7)

☞ 二重否定 (または多重否定) が否定の意味を強調する用例は、古フリジア語の時代から観察される。オランダ語、ドイツ語、英語でも古語では二重否定 (または多重否定) は強い肯定の意味にはならず、否定の意味を強調していた。今日でも話し言葉では西フリジア語と同様の現象を示すことがある。

(b) 虚辞の net

主文が否定文の場合に、心理的な理由から従属文が論理的な意味に反して否定詞 net を伴う否定文の形式をとることがある。この net を「虚辞の net」といい、西フリジア語にもその例が見られる。

Hy docht *gjin* lichten foar't er syn sin *net* hat. 「彼は思うようになるまで (=思うようにならない (net) 前には) 自分の考えに固執する」
(Sytstra/Hof 1925: 188)

Hy hie *gjin* rêst foar't hy *net* wist hoe't alles tagien wie. 「彼はすべてがどのように運んだかを知るまでは (=知らない (net) 前には), 落ち着かなかった」 (ib. 188)

参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

- Bech, G. 1955. *Studien über das deutsche Verbum infinitum*. Bd. I. København. Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab. (Tübingen. Niemeyer. 1983²)
- Bloemhoff, H. 1979. “Heranalyse van een Stellingwerper oppervlaktestructuur”. Århammar/Spenter (útj.). 1979. 31-38.
- De Haan, G. J. 1992. “The verbal complex in Frisian”. *Us Wurk* 41. 59-92.
- De Haan, G. J. 1993. “The third construction in Frisian”. *Dialektsyntax. Linguistische Berichte. Sonderheft* 5/1993. 161-179.
- De Haan, G. J. 1996. “Recent changes in the verbal complex of Frisian”. Petersen/Nielsen (ed.). 171-184.
- Evers, A. 1975. *The transformational cycle in Dutch and German*. Bloomington. Indiana University Linguistics Club.
- Hoeksema, J. 1980. “Verbale verstrengeling ontstrengeld”. *Spektator* 9. 221-249.
- Kroch, A./Santorini, B. 1991. “The derived constituent structure of the West Germanic verb-raising construction”. Robert, F. (ed.). *Principles and parameters of comparative grammar*. Cambridge. MIT Press. 269-338.
- Overdiep, G. S. 1947. *Volkstaal en dialectstudie. Verzamelde opstellen over taal- en letterkunde* (bezorgd door G. A. van Es). Antwerpen. N. V. Standaard-Boekhandel.
- Overdiep, G. S. 1937. “Het belang van het Friesch voor de studie van het Nederlandsch”. *Frysk Jierboek* 1937. 110-124. (再録 Overdiep. 1947. 119-129)
- Popkema, J. 1987. “Inkelde opmerkings oer Fryske en Nederlânske syntaksis”. Dyk/

Hoekstra (útj.). 46-56.

Wolf, H. 1995. “Ynvertearre tiidwurdkloften yn it Ynterferinsjefrysk”. *Tydskrift foar Fryske Taalkunde* 10. 1-11.

*本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。

「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要 44-1, 第 85 号, 1995, 37-81)

「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要 44-2, 第 86 号, 1995, 43-111)

「西フリジア語の文法構造 — 冠詞, 名詞, 形容詞 —」(北海道大学文学部紀要 45-1, 第 88 号, 1996, 21-81)

「西フリジア語の文法構造 — 代名詞 —」(北海道大学文学部紀要 45-2, 第 89 号, 1997, 79-176)

「西フリジア語の文法構造 — 数詞, 副詞, der —」(北海道大学文学部紀要 45-3, 第 90 号, 1997, 171-246)

「西フリジア語の文法構造 — 前置詞と後置詞 (1) —」(北海道大学文学部紀要 46-1, 第 91 号, 1997, 23-62)

「西フリジア語の文法構造 — 前置詞と後置詞 (2) —」(北海道大学文学部紀要 46-2, 第 92 号, 1998, 41-64)

「西フリジア語の文法構造 — 接続詞 —」(北海道大学文学部紀要 46-3, 第 93 号, 1998, 65-121)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (1) —」(北海道大学文学部紀要 47-2, 第 95 号, 1998, 21-97)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (2) —」(北海道大学文学部紀要 47-3, 第 96 号, 1998, 53-72)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (3) —」(北海道大学文学部紀要 47-4, 第 97 号, 1999, 89-124)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (4) —」(北海道大学文学部紀要 48-1, 第 98 号, 1999, 21-55)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (5) —」(北海道大学文学研究科紀要 101 号, 2000, 93-129)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (6) —」(北海道大学文学研究科紀要 108 号, 2002, 23-100)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (7) —」(北海道大学文学研究科紀要 111 号, 2003, 51-94)

「西フリジア語の文法構造 — 動詞 (8) —」(北海道大学文学研究科紀要 112 号, 2004, 1-103)

記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。

北大文学研究科紀要

「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要 44-3, 第 87 号, 1996, 41-107)

- * 本稿は平成 16 年度文科省・学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。
研究課題：「西フリジア語文法記述のための最終的研究——ゲルマン語類型論の構築に向けて」, 基盤研究(C)2, 課題番号 14510599 (研究代表者 北海道大学大学院文学研究科教授 清水 誠)